ポケモン不思議のダンジョン・白銀の盗賊団

カノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケモン不思議のダンジョン・白銀の盗賊団

【Ｎコード】
Ｎ２７３５Ｎ

【作者名】
カノン

【あらすじ】
最初の時の歯車が盗まれる日、一匹のピカチュウがキザキの森の中で倒れていた。彼は名を思い出せず、ネロと名乗る人間だった。
そして、キモリのリーフと出会い、キザキの秘宝探しを手伝うことになる。
それが、もうひとつの物語の始まりだった…

プロローグ（前書き）

初めましてこの小説の作者のカノンです。駄文＋更新に物凄く時間がかかりますが、頑張って書きますのでよろしくお願いします。

プロローグ

「貴様！これが…これが目的だったのか！」
一人の人間が目の前にいる闇に叫ぶ。
「だからどうした、何故…とでもいうのか？」
闇から男の声が聞こえてきた。暗く冷たい、それでいて何処か透き通った声
「見ろ…この世界を。純粋な闇に包まれた、静かで美しい暗黒の世界を」
闇の後ろに見えるのは。時が止まり、全てが狂った何も動かない混沌の世界……光を発する物など、真っ赤に燃えたぎる溶岩しか見つけられない。
「何故だ、何故こんなことをした…こんなことをして、いったいなにが楽しいというんだ！」
人間は気付いていなかった、闇の後ろに強大な力を持つ何かがいたことに。
「簡単だ。嫌いなんだよ、光が。光の世界が、流れる時が。」
闇はその何かを操るように両手を広げた。
「さあ…裏切り者のお前に見せてやろう、この世界から光を消し去った、時の力を…やれ！ディアルガ！」
『グオォォォォォォォォォォォォ！！！！！！！！！！』
その瞬間に、ディアルガと呼ばれた何かは、世界を揺るがす叫び声を上げ、人間に向かって暗黒に染まった時の咆哮を放った。
「な…うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっっっ！！！！！」
場は激しい時の閃光によって崩壊し、人間は全身を焼かれる激痛と共に、消え去った。
・　・　・

その時のこと。激しい暴風雨に森の木々は揺れる。時に近く、時に遠く、悲鳴のように雷鳴が鳴り響く。　その嵐の森の中、ある一匹のポケモンが倒れていた。微かにあった意識が体中を走る激痛によってだんだんと薄れていく。そのポケモンは、鈍る思考を動かして、ひたすらこのことをだけを考えていた。

――ここはどこだ？何がどうなっている、何より俺は一体誰なんだ？風がある、嵐が来ているのか？当たり前なことなのにとても新しい感覚……

思考が途切れ、意識が闇に沈んだ。

・

・

・

「うーん…だいぶすすんたけどまだまだありそうだな…」

同じ森の中を一匹のポケモンが歩いていた、そのポケモンは注意深く回りを見ながら、その森をすすんでいた。

そして二匹は出会うことになる…未来でねじ曲げられた運命によって。物語はそこから始まるのだ…時と闇をめぐる物語と、破れた世界をめぐるもう１つの物語が。

プロローグ（後書き）

こんな感じで書いて行きたいと思います。

一話　始まりは森の中（前書き）

一話目から早速遅い投稿です。多分これからもこんなペースだと思ってください。

そうそうこれ書いてる途中で福島県に行って城と鯱見て来ました。凄かったですよ、石垣とか石垣とかが。

一話　始まりは森の中

荒れ狂う嵐の森の中、一匹のポケモンが薄暗い一本道をもの凄い速さで駆け抜けて行く。緑色の体をしたポケモン、ジュプトルである。

――凄い嵐だ、これも世界が壊れ始めた影響か？だとしたら急がないとな…

「っ…！」

不意にジュプトルの目にエメラルド色の光を放つ何かが現れた。

「…結界か。ここに時の歯車が存在すると確信していなければこの空間があることすら認識できないだろう」

ジュプトルは光の発信源である時の歯車に近づく。「だが、そんなものが俺に通用すると思うな」

ジュプトルは歯車をつかみ、何の迷いも無く抜き取った。その瞬間に、嵐が止まった、風に飛ばされ、空中を舞っている木の葉がその場で止まる、そう、時が…止まった。

――この異変に、この世界のポケモンはすぐに気付くだろう。だが構わない、この世界で俺にかなう奴はいないことは分かっているからな。…あいつは…ファイは無事だろうか、今は無事であることを祈るしかない…

時の歯車があった場所から、少しずつ闇が染みだしてくる。

「…すまない、少しの間我慢してくれ」

ジュプトルはそう呟くとその場から立ち去っていった。

・

・

・

「あれ？急に雨が止んだ、それに風も止まってる？何で？」

歯車が取られてから少し後、緑色の大きな尻尾をつけたポケモン、キモリが突然止まった嵐に異変を感じていた。しかし、その疑問は

目の前に何の前触れも無く倒れている人影に掻き消された。キモリはその人影に驚きながらも、恐る恐る近寄る。
「ねえ、君、大丈夫？…死んでなんかないよね、生きてるよね、目を開けてよ！」
――声が聞こえる…聞いたことのない声だ…凄く気持ち悪い、なんだこの変な感覚は…
「うぐっ…」
起き上がろうとすると、体を激痛が襲った、仕方なく目を開ける。うっすらと、心配そうにしているキモリが見えた。
「あ、良かったー。気付いたんだね」
痛みが少し消えてきたのを感じ、ゆっくりと体を起こす。不思議と、そのキモリが大きく見えた、あの変な感覚もまだ消えていない。
「誰だ？…お前」
一人称は僕のようだが女声…メスか、信用できるのか？
少し警戒心を表に出して、そのキモリに名を聞いた。
「僕はキモリ。でもみんなからはリーフって呼ばれてるんだ。それで…君は？」
警戒されていることを知ってか知らずか、そのキモリは自分をリーフと名乗った。
「俺？…俺の…名は」
頭を抱えた。名前を、忘れるはずのない記憶を必死に思いだそうとした。
――だめだ、何も思い出せない
…一体…何で
「俺は…人間…」
なんとかそう言った。時間稼ぎのつもりで。しかし、予想もしなかった返答がリーフから返ってきた。
「人間？どう見てもピカチュウだよ？しかもオレンジ色の」

「は？」　目が文字通り点になった。一体何を言っているのかわからなかった。
――ピカチュウ？あのピカチュウ？あの電気鼠？しかもオレンジ色って…まさか。
頭が混乱していた。すぐに自分の手を見る。
「？？？」
――あれ？俺の手…オレンジ？　え？
見えたのは。色はオレンジだったものの、短く小さいピカチュウの手…訳がわからない。
全く情報の整理もしないまま、近くにあった水溜まりに自分の体を映した。体も、耳も、全部ピカチュウ　…ピカチュウそのものだった。
――気がついたらここに倒れていて…ピカチュウになっていた？何で？原因を探そうにも何も思い出せないし…
「ねえ！君なんて名前なの？ぼーっとしてないで教えてよ！」
何か原因があるはずだ…だがこんな所で考えても無意味だろう。今は、
「名前…か」
取り敢えずそう呟く。今の状況を夢と見ることにした。
「そ、名前。ほんとにわかんないんだったら僕が勝手につけるよ？」
「？」
少しだけ耳を傾ける。
「うーん…そうだ！ピカチュウとオレンジから取ってピカジーってのは？」
「却下だ。」
考える必要もなく即答できる酷いネーミングセンスだと思った。
「え～。じゃあなんて呼ばれたいの？」
――そう言われてもな…まさか記憶喪失になるなんて。
その時、自分の足元でキラリと何かが光った。
「？」

なぜかそれが気になり、拾ってみる。それは、稲妻のマークが刻まれた、銀の首飾り。その裏には三日月のマークと【Ｎｅｒｏ】という文字も刻まれている。

――【Ｎｅｒｏ】…イタリア語で【ネロ】か。なぜかしっくりくるな…まさかこれが俺の名前？

「そろそろ決まった？それとも決まらなかった？後者ならピカジーで通すよ？」

その名前では絶対に呼ばれたくない。

「それは却下だって言ったろ。俺の名はネロだ。取り敢えずそう呼んでくれ」

首飾りを巻き、ポケモンとなった人間はネロと名乗った。

「ネロ…ネロだね。わかった、特に怪しいやつでもなさそうだから覚えておくよ。　…あっ！忘れる所だった！」

リーフは少しの間忘れていた、この森にきた本来の目的を思い出した。

「どうしたんだ？リーフ」

ネロは、取り敢えず、今を夢ということにして、リーフにその事を聞いた。

「いや、ちょっと探検の用事を思い出してね…そうだ、ネロもいっしょに来る？一匹より二匹の方が心強いし。」

その言葉に、ネロは少し考える。この訳のわからない状況の中で冷静に状況判断など出来るだろうか、今はリーフに同行した方が今後、地理を知っておく上でもいいだろうが。だが…

「信用していいのか？」

――だって、他人を簡単に信じることはできないだろう。

「ちょっと！疑い過ぎだよ？僕はただ、一人じゃ心細いから…」

ネロはリーフの目を見る…今まで一度も見たことのないような、素直で純粋な目、どう見ても嘘を言っているようには見えない。

「…わかった、ここでお前と別れても途方に暮れるだけだろうからな」

――…まあ、元々考える余地なんて無いしな。誰彼かまってられないな
「本当！やった！」
リーフは目を輝かせる。
「じゃあちょっと待ってて！少し準備するから」
そう言って、腰につけていた一人用のポーチに入っている道具を整理した。
「…よし。じゃあ行こうか。ネロ、気をつけてよ？」
リーフはネロに注意するように促した。それは、つまりポケモンとして戦うということだろう。
「ちょっと待て」
ネロはリーフを止める。　――ピカチュウなんだ、なんか技出せないとな
取り敢えず、体に軽く力を入れてみる。できるだけ電気を出せるように。
すると、パチパチと頬に電気が溜まる感覚を感じた。今度はそれを放つように力を入れる。
バチバチィ！
ネロの頬から電気が放たれた。少し小さいが、もっと力を入れれば実戦で使えるようになるだろう。
「わ！ちょ…ちょっとネロ、危ないよ」
電気が少しリーフをかすったらしく、驚いた様子だった。
「すまない、まだノーコンらしい」
――凄い、これがポケモンの力か…
少し感動した。今まで感じたことのない新鮮な感覚…
「…さて、試し打ちも済んだし。準備は万端だ」
ネロはダンジョンの入り口へ歩き出す。
「あ！待ってよ、ネロ！」
それにリーフも続く。

どこかで…運命の歯車が動き出した気がした…

一話　始まりは森の中（後書き）

うーん…まだなのかな…

ネ「何処だここ。変なとこに来ちまったな…」

きたぁぁぁぁ！（狂喜）

ネ「うぉ！…なんだ作者か…脅かすなよ」

という訳でこれからは前書きと後書きでもネロたちをよろしくお願いします！

ネ「？」

二話　時を奪う者（前書き）

うわぁぁぁ！！気が付けば一ヶ月半経ってる！！
マジすいません！！テストや何やで忙しかったんです！

ネロ「取り敢えず落ち着け」

…分かった、そうする。今は悔やむより更新速度上げないと…

あっ、忘れてた。今回はネロのある二つの能力が片鱗を見せます。

ネロ「何？」

てなわけでどうぞ！

二話　時を奪う者

「へぇ。これがダンジョンか…」
ダンジョンに入るなりネロが言った。
「そ、これが不思議のダンジョン、キザキの森」
ダンジョンに入る直前に、リーフがしてくれた話によると。この世界には入る度に形が変わる不思議のダンジョンという物があるらしい。
その中にも難易度があり、キザキの森はその中では簡単な部類に属するらしく、肩慣らしには丁度いいダンジョンのようだ。
「…静かだな」
「うん…」
さっきから、何の音もしない。歩くたびにサクサクと、足元の固まったような草が砕ける音が、異様に大きく聞こえる。
「生き物の気配がしない。こんな所にポケモンがいるのか？」
――さっき見た木の葉、空中で止まっていた…草木もみんな固まっている、どうなってるんだこの森は…

サク…

ネロがもう一歩歩いたとき…

カチッ

何かを踏んだ音がした。
踏んだ地面にマルマインのマークが浮かび上がる。

「…！！」

ドゴォォォン！！

次の瞬間、現れたスイッチから凄まじい爆発が起こった。
自爆スイッチである、ダンジョンにおいて注意しなければならないのはポケモンだけではない、こういったトラップにも注意しなければすぐにやられてしまうのだ。
「ネロ！」
リーフが驚いて駆け寄る、ネロとは少し離れていたので爆発には巻き込まれてはいなかった。
「あれ？」　爆発によって生じた煙が晴れる、しかしそこにネロの姿はなかった。
「いない…どういうこと？」
リーフは困惑する、その時…
「ふう…危ねえな、ダンジョンには罠もあるのか」
ネロの声が上から聞こえてきた。
リーフはすぐに上を見る、ネロはいつの間にか木の上に乗っていた。爆発のダメージは全くない。
「え？あれ、何で？」
自爆スイッチを踏んでもなお、無傷ですんだことがリーフには理解できなかった。
無理もない、何しろそれをやってのけたネロですら、自分がどうやって爆風をかわしたのかが全く分からないのだから。
――一体何が起きたんだ、体が勝手に動いた…人間の時の感覚が残っているのか？
ネロも内心動揺していた、しかし考えるのは後回し、今は目の前のことに集中すると決めた。
「今の音で周りの奴らに気づかれたかもな…」
ネロは木から迅速に飛び降りようと立ち上がった。
しかし…

ずるっ

「うおわ！」

ドシャ！

あろうことか足を滑らせて木から落ちてしまう。

「…プッ、アハハハ！」

リーフはつぼにはまったらしく、大笑いした。

「笑うな！」

ネロは赤面して言った。

「とにかく行くぞ、先へ進むならこっちだ」

そう言ってネロは前進する、ピカチュウは基本的に勘が鋭い種族であり、ダンジョンを進む時において、何処に行けば先へ進めるかを大まかに理解出来る。

それゆえにここは自分が先導すべきだと考えた。

ガッ！

「うお！？」

しかし今度は木の根に足を取られて顔面から転ぶ。

「……僕が先に歩いた方がいいんじゃない？」

「痛つ…大丈夫だ」

そんなこんなで二匹はネロを先頭に先へ進む。

・・・

「…チッ」

キザキの森奥地で、ジュプトルは足が止まっていた。

時の歯車を覆い隠すための結界が時の停止によって静止し、今度

は強力なバリアとなって彼の前に立ち塞がっているのだ。
――まさかここまで計算していたとはな…ここに番人がいない理由が良く分かった
時が止まった物体は、余程の力が無い限り破壊することは不可能なのだ。
「リーフブレード！」
ジュプトルはありったけの力を込めて結界を攻撃する、しかし結界はびくともしない。
「…仕方ねえ」
――この技はあまり使いたくないんだが
今度はリーフブレードで自らを切りつける。体力が限界になるまで、何度も。
一見すると意味不明に見える行動だが、ジュプトルにとってはこのバリアを打ち破るための秘策だった。
続いて刃物のように鋭利な木の葉を大量に発生させた、それはくさタイプ最強クラスの威力を誇る技、さらにジュプトルの特性：しんりょくにより威力は跳ね上がる。
「リーフストーム！」
その名の通り、特性によって巨大化した葉の竜巻がバリアを吹き飛ばした。

反動でジュプトルは膝をつく、体力を限界まで削っての大技は特にキツイ。
「……くっ」
痛みをこらえてジュプトルは立ち上がる。
――この程度のダメージで、立ち止まってたまるかよ…
ジュプトルは走り出す、疾風のように森の中を駆け抜けていった。
・　・　・

ネロとリーフは着実に奥へと進んでいた。
――だいぶ分かってきたな…ダンジョンの構造が
まずは部屋、ポケモン達が自由に動き回れるほどの広い空間。
続いて通路、ポケモン一匹が通れるほどの幅しかない、ここで敵に出くわすと厄介だな…といっても、まだ敵となるポケモンと会って無いんだがなぁ…

「ん？」
そんな中、ネロはやたらとダークな気を放っているトロピウスを発見する。
そのトロピウスは背中の葉っぱのような羽根で低空飛行をし、こちらに近づいてくる。
「リーフ…」
ネロはリーフの肩を叩く。
「何？」
「あのトロピウスは敵か？」
トロピウスの方を指差す。
「うーん…敵だね、凶暴なポケモン特有の嫌な感じかする」
ネロが感じた気は、敵ポケモン特有の物らしい。
その間にトロピウスが射程圏内に入る。
そして鋭利な木の葉、はっぱカッターを乱射した。
「おっと」
ネロはそれを全弾かわした、リーフも余裕で避ける。
「狙いがめちゃくちゃだね」
「どうでもいい、一瞬で落とす」
はっぱカッターの雨を避けながら、ネロは接近し、トロピウスの懐に入る。
そしてトロピウスの顎をサマーソルトで蹴り上げ、技を中断させた上でのでんきショックの連続使用で、派手に倒して見せた。

「…凄いね」
「まあな」
リーフがそう言ったので、そっけなく返しておく。
「派手好き？あんなに技使ってるとすぐに切れるよ」
「そんなつもりは無いんだが…そう言うなら節約するか。先行くぞ」
ネロ達は更に森の奥へと進んでいく。ネロの勘ではそろそろ最奥部に着くはずだった。

そして、真っ直ぐ続くだけの長い通路に出た。
「なんか感じが違うな、急に普通の森に出たって感じだ」
「最奥部の周りだけダンジョンじゃない所もあるんだよね、何か不思議な力でも出てるのかな」
そこ辺りはリーフでも分からないらしい、ダンジョンでないと聞き、ほっと一息つく。
――疲れるな、ダンジョンってのは。林檎いくつか食ったのにまた腹が減ってきた。

「…！！」
瞬間、ネロはただならぬ違和感を感じた。この近くに何かがいる…そう思えて仕方がないのだ。
「ネロ、どうしたの？」
リーフは気付いていないようだ、すると、この違和感は気のせいなのか？

「少し下がってろ」
ネロは違和感のある茂みに向かって、でんきショックを放った。
電撃は上にそれ、そこにあった木に焦げ跡を残した。
「…そこにいるな、出てこいよ」
確信を持って言う。

「何なの？」
リーフが不思議そうにネロを見る。

ガサッ

その時、茂みの中から物凄い速さで何かが現れた。
「何故分かった、気配を完全に消した俺を」
その者の手元から淡いエメラルド色の光が漏れる。
そう…ネロが感じた違和感の正体は…

ジュプトルだった。

二話　時を奪う者（後書き）

急いで書いたから雑な文体がさらに雑になってます…すいませんｏｒｚ

ネロ「ジュプトルとまだ戦わないのかよ」

気が付いたら出てきた所で終わる流れになってた…

ネロ「まあ、こんなもんでも見てくれる人達がいるんだ、頑張れよ」

うう…ありがとう。

次回はいよいよジュプトルとバトルだ！！

三話　キザキの森の秘宝（前書き）

はい、三話です！

最初のダンジョンでジュプトルとの対戦って、よく考えてみたら、めちゃくちゃ危険です。

ネロ「よし、俺の力を見せてやる」

…まあ、三話、始まります。

三話　キザキの森の秘宝

ジュプトルは内心驚いていた。
完全に気配を消した、気付かれることはまずあり得ない。そう確信していたのだから。
それを見ず知らずのピカチュウに簡単に見破られてしまったのだから。
「何故分かった」とはつい口をついて出てしまった言葉だった。

「さあな、お前がそこに隠れている…そう思っただけだ」
ネロはジュプトルを警戒し、目を離さずに言った。

「ど…どう言うこと！？」
リーフは状況が上手くつかめていない様子だった、あまりに急な出来事に目を回している。

「リーフ、こいつ…強いぞ」
「う…うん」
それでも、あのジュプトルが敵だということは何とか理解したらしい、コクリと頷いた。
そして、二匹は戦闘体勢を取る。
「戦うつもりか…俺と」
ジュプトルが言った。
「お前が持っている物…」
もしかしたら俺と何か関係があるかもしれない…
「見せてもらうぞ…でんきショック！！」
ネロはジュプトルに電撃を放つ、それをジュプトルは数歩退き、かわした。
――チッ…まだダメージが残っているな…

ジュプトルの体力はまだあまり回復していない。そのため、大きく動かず体力の消費を抑えた。
――動きが鈍い…それなら
「でんこうせっか！」
ネロは高速でジュプトルに突進する、
「動きが直線的だ、リーフブレード！」
ジュプトルはタイミングを合わせ、リーフブレードをネロに直撃させた
「…！？」
――手応えがない？
…これは影分身！？何故だ、切る直前は、確かに実体だったはず…

その直後、背後からジュプトルに電撃が当たる
「っ…ぐぁ」
ジュプトルは電撃に体勢を崩し、手を地面につく。
――クッ…背後！
その手を軸にして回転し、ネロにエナジーボールを放つ。
「そう来ると思ったぜ」
その時、背後に回り、追撃のために距離を詰めていたネロは、エナジーボールをでんこうせっかを応用したジグザグのステップでかわし、アイアンテールをジュプトルの頭部に当てた。
「ぐ…」――俺が万全の状態だったとしても…この二匹は…強い
ジュプトルは軽い脳震盪を起こし、動けない。
――今だ！
ネロは二度目のアイアンテールでジュプトルの手元を打ち払った。ジュプトルが持っていたあの秘宝が手元から離れ、ネロはそれを見事にキャッチした。

それはネロの手元で淡いエメラルド色の光を放つ…ネロの胸が一

層高鳴った。
――間違いない…俺はこれを知っている！
「ネロ…それ…」
「何だ」
その時、リーフのわななき声が聞こえた。
「それ…もしかして…うわぁっ！」

しかし、言葉を言い切る前にジュプトルがでんこうせっかでリーフを吹っ飛ばした。リーフは固まった樹木に激突し、気絶した。
「リーフ！」
ネロが叫ぶ、リーフは動かない。
「…！！」
――ジュプトルが消えた！？
ネロの視界からジュプトルが一瞬でいなくなった。
次の瞬間、ジュプトルがネロの足元から飛び出し、強烈なパンチを直撃させた。
「ぐっ！」
――なっ…何が起きた…
ネロでも理解できないほどのスピードだった。
ジュプトルのあなをほるだ。地面に穴を掘ってそこに潜り、相手の足元から攻撃する技。ジュプトルの常人離れした素早さが、あたかも消えたように見えたのだ。
――じめんタイプ扱いだから相性も悪い…クソ、体力のほとんどを持ってかれた
「時の歯車を返してもらう…こいつはここにあるべき物ではない」
そう言ってジュプトルはネロの手から時の歯車を奪い返し、その場を立ち去った。

ジュプトルは速く、誰よりも速く走った。手負いのはずだが、それを全く感じさせない。
そしてジュプトルはネロとの戦いを振り返る。
――あのピカチュウ…似ている、名も知らないあの人間に…口調も、雰囲気も…まさかな…
ジュプトルはさらにスピードを上げ、時の止まった森の中を走り去った。

・
・
・

ネロは木に寄りかかり、リーフが目覚めるのを待った。

「う…ん」
数分後、リーフが目を覚ました。
「ネロ…あっ！そうだ！ジュプトルは？時の歯車は？」
ジュプトルも言っていた気がするが、あれは時の歯車と言うらしい。
「奪い返された。なあリーフ、時の歯車って…一体」
その辺は聞いて見ないと分からない。
「そう…えっとね、時の歯車はこのポケモン世界の秘宝で、この世界の時を動かすとても大切な物なんだ、それを取った時、その一帯の時間が止まってしまうんだって…」
どうやら、想像以上に危険な物らしい。
「だから誰も近付かないしましてや盗ろうとなんて思わない…だけど…」
「ああ、ジュプトルはそれを持っていた。この森も時が止まっている」
空中で止まっていた木の葉がその証拠。
――だが何故そんな危険を侵してまで時の歯車を盗ったのだろうか…

その理由は本人に聞かなければ分かることは無いだろう。

「うーん…今考えても仕方がないや。あともう少しだし、折角だから奥地まで行こっか」

リーフが言った。確かにこのまま不完全燃焼で帰るよりはましだろう。

「そうだな、行ってみようか。まだ何かあるかも知れないしな」

それは淡い希望だったが、それゆえに頷くには十分な理由になった。

再び歩き出してから数分で奥地についた。そこに動くものは何もなく、砕けた結界の破片が空中で静止し、木々が黒く変色して、周囲に嫌な空気を振り撒いていた。

「酷いな…これは…」

「うん…でも、何かないか探して見ようよ」

「…ああ」

ネロとリーフは淡い希望を胸に何かを探し始めた。

「やっぱり…何もないね」

「ああ…そうだな」

あらかた探し終えて、リーフが言った。ネロはそっけなく返す

「そうだ、リーフ」

「ん…何？」

ネロはリーフに前から聞きたかったことを聞くことにした。

「お前…探していた秘宝って、時の歯車のことだったのか？」

――だったとしたら俺はヤバイ奴に借りを作ったことになる

「え？…えっと…うーん、まあそう言うことになるね」

「は？」

まさか…

「お前、どんな物かも知らないで、ただ秘宝って情報だけでここま

で来たのか？」
だとしたらかなりのバカか、または天然か…
「だって探検ってそういうものでしょ？始めから知っていたらつまんないよ」
「そういうもんなのか？」
「そういうものなの」
「…」
――ポケモンの本能ってやつなのか？利益よりも楽しさを優先するのは…
話している内に、ネロはまだ、奥に空間があることに気がついた。
「おい、リーフ」
無論、その事をリーフに伝える。
「確かに…気になるね、行ってみようよ」
「もちろんだ」

狭い小道を抜け、そこにはとても小さな空間があった、しかしそれだけではない。
空間をねじ曲げ、渦を巻く穴が、空中にぽっかりと空いていたのだ。
時が止まった空間も、この穴に無理矢理動かされているように見える。
「ネロ…この穴って…」
リーフがまるでこの世のものではないものを見たかのように言った。
ネロはその穴に近づく。
「ネロ！危ないよ！」
リーフがネロを止める。だがネロは別のことに集中していた。
――これは…もしかして…
「リーフ、この穴、どこかにつながってるぞ」
ネロは言った。

一瞬の沈黙…
「まさか…」
「そのまさかだ」
・・・
「…わかった、行ってみようか」
少し考えてリーフが出した答えは以外だった。
「ネロの勘なら確証ありそうだしね」
その根拠がこれ、ポケモンの思考はやはり人間とは大分違うらしい。
「まあ、行き止まりにつくまで先に進んで、戻ってくればいいしな…よし」
ネロは視線を穴に向けた。
「…行くぞ」
「うん」
ネロとリーフは足並みを揃えて空間の穴に入っていった。

三話　キザキの森の秘宝（後書き）

てなわけでジュプトルの兄貴にはやられ役になっていただきました。

あと今回は後半がぐちゃぐちゃになってしまいました、誠にすいませんｏｒｚ

取り敢えずは眠気に対する耐性を持ちたいです

ネロ「まず寝ろ」

…はい

四話　謎の鍵・蜘蛛の軍勢（前書き）

はい、四話です開始から二ヶ月でやっとここまで来ました。でも思えばまだ小説内の時間一日もたってない…

ネロ（じ～～～）

ネロがちょっと期限悪そうにしてるので四話をどうぞ！

四話　謎の鍵・蜘蛛の軍勢

穴の内部で、ネロは異次元に迷いこんだのではないかと思った。穴の内部は、空間がねじれている様に感じた、時間も何処か変な気がする。

――上も下も無い…とても不安定な場所だな…

しばらく進むと、突然視界が開け、キザキの森とは全く違う空間に出た。そこは、白く輝く石灰棚に、青く透き通った水がたゆまなく流れ落ちる、とても美しく、神秘的な湖。

「これは…」

「凄い…」

ネロ達はそれ以上何も言えない。言葉を失うほど美しい光景だった。

「あれ？何かあるよ」

二匹はその光景に見入っていた。ふと、リーフが何か発見したらしく、石灰棚の中心に向かって走り出した。その方向を見ると、そこには時の歯車とは対象的な、赤い光を放つ何かがあった。ネロもそれに近づいていく。

「これ…何だ、何かの鍵みたいだが…」

ネロはその物体に手を伸ばした。

バチィ！！

しかし、強い炸裂音がして、その手は弾かれた。

「っ…何だ…これ、結界の類か」

「ネロ、どうしたの？」

リーフが少し心配そうに聞いてきた。

「ああ、この鍵、なんか…俺を拒絶してるみたいだ…何となく」
ネロは感じたことをリーフに言った。
「そう…そうだ！　じゃあ試しに僕も触ってみよう、もしかしたら何か変わるかも知れないし」
そう言って今度はリーフが物体に手を伸ばす。

「あれ…」　物体はネロとは明らかに違う反応を見せた。
「触れた…」
その反応に、リーフも少し驚いた様子だった。
リーフは物体を手に取った、時の歯車と違い取っても周囲には何ら影響は無いらしい。周囲からは　相変わらず平然と水の流れ落ちる音のみが聞こえてきた。
「これを見た目どうり鍵だとして…何処の扉の鍵なんだ？」
その鍵は、差し込む所に何本か溝が彫り込まれていて、持ち手には、見たことも無いような装飾が施されていた。
「分からない、でも凄い物であるのは確かだね。僕の住んでいる所の近くに図書館があるんだ、もしかしたらそこにこれについての本があるかも知れない。とりあえず、収穫はあったし、引き上げよう」
「そうだな…」
謎の鍵は、リーフが自分のポーチにしまい、ネロ達は立ち去ろうと歩き出した。

その時
「！！」
ネロの背中に高速で何かが当たった。ネロはそれに吹っ飛ばされ、中心からだいぶ離れた樹木に体を打ち付けた。
「ぐ…痛ってぇ」
「ネ…ネロ、どうしたの！？」
リーフがネロに駆け寄る。ネロの体には、糸の様なものが巻き付いていた。

「分からない…だが、気を付けろ、何かが俺達を狙っている…」
ネロは体を起こすが、巻き付いた糸が邪魔をし、思うように動けない。技自体はいとをはくなのだろうが、威力は比べ物にならない。いとをはくは本来、相手の動きを鈍らせるだけで、技に威力は無いはずなのだ。「何か、って言われても…一体何処に…」
リーフは辺りを見渡す…上から何かがうごめく音がした。
「そこだ！！」
リーフは真上に向かってエナジーボールを発射した。技は樹木の枝に命中し、その音の正体が姿を現した。
「誰だ…お前は」
ネロがそのポケモンに言った。赤と黒の模様の体、黄色と紫の縞模様の足、蜘蛛の様なポケモン、アリアドスだ。
「我らは…アリアドス軍団！！」
アリアドスが言うと、それが合図となって回りの木々から緑色の虫ポケモン、イトマルの大群が現れた。「我らの住処を荒らす者共は死、あるのみ！！」
「は？」「え！？」
ネロとリーフはほぼ同時に声を上げた。
「待て待て待て！！一体どういう事だ？」
「そうだよ！ちゃんと説明してよ！」
「問答無用！！」
――もう駄目だこいつら…　ネロがそう思ったとき、彼ら曰くアリアドス軍団は一斉に飛び掛かってきた。
「い…いくら何でも多すぎだよ、ネロ！」
「弱音を吐くなリーフ！吐く暇あったら戦え！！」
――と言っても流石にこの数は不味い…何とかここを切り抜けるためには…
ネロは尻尾を横に振り、向かって来るイトマルをアイアンテールを応用した水平斬りて切り払った。リーフもエナジーボールを連射してイトマルを倒していく。

「なかなかやるようだが、その程度で倒されるイトマルではない！」
倒れたイトマルは、何事もなく立ち上がった。
「くっ…」
「いくぞイトマル！」
アリアドスはいとをはくを使い、上に巨大な蜘蛛の巣を張る、それを合図にイトマルもその蜘蛛の巣に糸を繋げ、この場そのものが巨大な蜘蛛の巣…狩り場の様になった。
「蜘蛛の糸による包囲網か！！」
「不味いよ…これ…」
イトマルはネロとリーフの周囲を取り囲み、一斉にどくばりを連射した。
ネロ達は避けきれるはずもなく、大量のどくばりを食らった。毒が体に回り、更に体力を削る。特にくさタイプのリーフはかなり衰弱していた。
「っ…リーフ、大丈夫か！何か解毒出来るものは…」
「ポーチに…オレンの実と…モモンの実が…」
リーフは弱々しく言った。
「くっ…一人分しかないか…まあいい、両方食ってろ！」
「でも…」
「いいから！！」
リーフはネロに促され、木の実を二つとも口に運んだ。少し元気が出たようだ。
「ネロ…どうしよう、この状況、どう考えても不味いよ」
「……」
――どうする…この状況…無数のイトマルとその糸、ボスのアリアドス、水…そうだ、水！！
ネロは力を込める、バチバチと、頬に電気が溜まる…
――もっと強く…あいつらを一撃で倒せるほどに…
頬に溜まっている電気が圧縮し、更に電気が溜まる。　――これだ！

「リーフ！飛べ！」
「え？うん！」
リーフはネロの指示通りに思い切り高く飛んだ。それと同時に、ネロは頬に溜まった電気を水面に放出した。
「１０まんボルト！！」
ネロの放った電撃は水面を通り、イトマルの糸を通って全ての敵に当たる。避けようの無い強力な電撃で、アリアドス軍団は全員が戦闘不能になった。

四話　謎の鍵・蜘蛛の軍勢（後書き）

てなわけで前回のジュプトル兄貴に続いてアリアドス軍団と連戦してもらいました

ネロ「お前は…俺達を殺す気か…」

リーフ「あぁ～、もうくたくた…」

まあまあ、生きてたから良いじゃん♪その調子なら次回も大丈夫そうだ

ネロ「まだあんのかよ！」

ハハッ♪また次回もよろしくお願いします！

五話　ＭＡＤの脅威、青の皇帝（前書き）

はい、今回もバトルです、しかも格の違う相手とのバトルとなります。

そして今まで空気だったリーフが前線に出ます。

ではどうぞ。

五話　ＭＡＤの脅威、青の皇帝

「ハァ、ハァ…うぅ」
ネロは地面に手をつき、荒い息をたてる。
――くっ…毒が…もう立つことも…
「大丈夫！？ネロ！」
リーフが心配して言った。
「大丈夫…だ」
ネロは立ち上がろうとするが体に力が入らない、前のめりに倒れてしまい、動けなくなった。
「ネロ！どうしよう…何か解毒出来るものは…」
手持ちにオレンとモモンの実は無い、リーフは周囲を見渡すが、見えるのは真っ黒に焦げたイトマル達とアリアドス、それに石灰棚だけであり、それらしき物は全く見つからない。
「一体どうすれば…」

「…リーフ」
慌てるリーフにネロが声をかける、その声も何処か弱々しい。
「なっ、なに、ネロ！」
「なにかが…近付いてきている…あそこだ」
ネロは森林の方に指を指す。極限状態だからなのか、ネロの勘は冴え渡っていた。自分でも何故か分からない、只、そこに何かいるという確信に似た感覚があった。

そして、それは間違いではなく、今度は三匹の、アリアドス達よりも遥かに強そうなポケモン達が姿を表した。左には紫色をしたコブラの様なポケモン、アーボックが、右には同じく紫色のこちらは巨大なサソリのようなポケモン、ドラピオンがいて、中央にその二匹を従えているであろう、頭に赤い扇状の鳥の羽のようなものを生

やした黒いポケモン、マニューラがいた。
「君達は、誰…？」
リーフが三匹に問う。ネロは嫌な予感しかしない、三匹が、特にマニューラがとてつもない威圧感を放っているのだ。
「おい、ボスに軽々しい口をきくんじゃねえ！」
ドラピオンがリーフを睨み付けた。
「別にいいさ、ビクビク震えていないだけ、他の奴らより度胸がある」
マニューラがそう言ってドラピオンを制した。
「ワタシ達は名乗る程の者じゃ無いさ、そんな事よりこいつらを倒したのはあんた達かい？」
マニューラは辺りを見回して言った。
「…だとしたら何だ」
ネロが答える。
「あのアリアドス達はここら一帯を縄張りにしているゴロツキ達でね、そのせいで此処のお宝には迂闊に手は出せなかった、此処にいて、アリアドス達が倒れてるってことは、持ってるんだろ？お宝を」
――こいつら…謎の鍵が目的か、せっかく見付けた物をを渡すわけにはいかない
「持っていない…そう言っても大人しく引き下がってはくれないか」
ネロは、動かない体を無理矢理立ち上がらせ、戦闘体勢を取る。
「へぇ、ワタシ達と戦うってのか、そんなボロボロの体でワタシに敵うと思ってるの？」
ネロの動きに反応し、警戒するドラピオンとアーボックを自分一人で大丈夫だと制し、マニューラも身構える。
瞬間、マニューラが消え、ネロにふいうちを直撃させた。
「！！」
ネロは叫ぶことも出来ずに、激痛でその場にうつ伏せに倒れ込んだ。

――ぐっ…な…何が…起きた…
「ふいうちだよ、あんたみたいに攻撃する気満々な奴は逆に倒しやすいんだ」
マニューラが見下した目でネロを見る。
「ネロ…」
その中でリーフは、必死に自分に出来ることを探す。
「さぁて、お宝を素直に渡しな。この状況の中で、まだ隠すんだったら、もっと痛い目を見るよ」

「…！」
気がついたらリーフは、ネロを護るようにマニューラの前に出ていた。
「…邪魔だよ、どきな」
マニューラが迫る、しかしリーフは動かない。
――馬鹿…リーフ…お前もやられるぞ、逃げろ
「嫌だ」

「あのアリアドス達を倒したのはあいつだろう？あんたには何の危機感も感じないね、そんな力でワタシに勝てると思っているのかい？」
確かに、リーフの実力ではあのマニューラを相手に戦えるはずもない。リーフはただの探検好きのポケモンであって、今までこんなピンチな状況に陥ったことなど全くなかったのだ。マニューラと戦うには、戦闘経験が少なすぎる。
それでもリーフはネロを守ろうとマニューラの前に立ちふさがった、今の自分が持てる勇気を精一杯に振り絞って。タイプの相性も最悪なこの敵に立ち向かおうとしている。
「それでも…僕も戦う！苦労して手に入れた宝を、君達なんかに渡してたまるか！！」
「リーフ…」

「そうかい、じゃあこっちも容赦しないよ！」
マニューラはリーフに接近し、つじぎりでリーフを切りつける。
「っ…エナジーボール！」
リーフはそれに耐え、エナジーボールをマニューラの急所に当てた。
「ちっ、思ったよりやるじゃないか、今のはなかなかだった」
急所に当たったのにもかかわらず、マニューラは余裕だった。こおりタイプのポケモンはくさタイプの攻撃のダメージを半分に抑えることが出来るのだ。
「それでも純粋な経験の差には敵わないさ…こおりのつぶて！」
マニューラは小さな氷の塊を数個作り、それを素早くリーフに繰り出す。氷は高速でリーフに当たり、リーフは悲鳴をあげ、氷が当たった箇所を腕で押さえて、その場にうずくまった。
「う…あぁ、強い…」
リーフを倒し、マニューラはあることに気付く。
「ん？思えばあんたしか入れ物を持ってないじゃないか。なるほどね、ワタシの注意を引き付けて、ポーチを持ったこのキモリだけを逃がそうって魂胆かい。でも惜しかったねえ、元々どっちも逃がす気は無いのさ」
「くそ…一体何者なんだよ…お前ら」
ネロはマニューラに言った。ネロは既に、毒によって体力を限界まで奪われており、何とか意識を保っている状態だった。
「さっき言っただろ？名乗るほどの者じゃない、それでも知りたいなら答えてあげるよ。ワタシ達はチームＭＡＤ（マッド）、しがない盗賊さ」
マニューラはその問いかけに答えた。
「ＭＡＤ…まさか、あの悪名高い！？」
リーフはその名を知っていた、ＭＡＤは世界的に有名なおたずね者、お宝のためならどんな非道なことも平気で行うという盗賊チームだ。
――ＭＡＤ…くそ、毒が、こんな毒が無ければ…

ネロは敗けを認めず、心の中で叫んだ、それが負け惜しみに聴こえるのは何故だろう。
「さあ、お宝はワタシ達が貰っていくよ」
マニューラはリーフに近付き、ポーチに手を伸ばす。リーフの敗北の二文字が浮かび、目を閉じた。
ネロもリーフも、もう抵抗する力は残っていなかった。

その時

「ハイドロポンプ！！」
巨大な圧力がかかった大量の水がマニューラの手を弾いた。
「ちっ…誰だい！」
マニューラがハイドロポンプが飛んできた方向に向かって言った、今の一撃で腕がビリビリと痺れ、動かせない。
「弱いものいじめをしているのが見えてな、相変わらず容赦のよの字も見当たらないな、マニューラ」
ハイドロポンプを放ったであろうポケモンはマニューラを前から知っているようだった。三ツ又に別れた王冠のような嘴に、切れ味鋭いヒレのような翼、その姿からは王者の風格が漂う。
「っ…エンペルト」
マニューラはエンペルトの姿を見て後ずさる、この二匹、過去に何かあったのだろうか。「…ずらかるよ、ドラピオン、アーボック」
マニューラはそう言って、後ろに下がる。
「え…でも、ボス…」
「いいから行くよ！相手が悪すぎる」
マニューラはきびすを返し、走り出した、それにドラピオン、アーボックも続き、直ぐに見えなくなった。

――行った…助かったのか…良かっ…た…
そしてネロは意識を失う、もう大丈夫だという安心感で、情報の

整理は全く出来なかったが、それでもあのエンペルトなら大丈夫だろうと確信して、ネロの意識は消えていった。

五話　ＭＡＤの脅威、青の皇帝（後書き）

と言うわけでタイトルどうりＭＡＤと戦っていただきました～

ネロ「お前、俺にどれだけ戦わせれば気が済むんだ」

まあまあ、これで一日目のバトルは全部終わりだから、気絶もしたんだしゆっくり休め。

ネロ「わかったよ…では、また次回」

六話　ゼロの島の湖（前書き）

はい、六話目となる今回は、リーフがぶっ壊れます。

リーフ「え？それっｔ…」

あとエンペルトもほんの少し壊れます。

エンペルト「何？」

ではどうぞ。

六話　ゼロの島の湖

・　・　・

「…ネロはこれで本当に大丈夫なの？」

リーフが木の根元に横たわるネロの横で、エンペルトに言った。

「ああ、応急処置はした、少しの間は動けないだろうが、直ぐに良くなる」

ネロが倒れた後、エンペルトはネロをこの木陰に運び、体力を回復させるオボンの実と、解毒作用や麻痺からの解放、その他もろもろの効果があるラムの実、俗に言ういやしの種をネロに食べさせた。そして今、ネロは静かに眠っている状態である。

「しかし…眠気覚ましの効果もあるいやしの種を食べさせても目を覚まさないとは、あとすこし処置が遅かったら手遅れになっていた」

「…ネロ」

リーフは心配そうにネロを見る。

「まあ難しく考えないで待ってよう。心配は体に毒だぞ、リーフ君」

すると、エンペルトが少し砕けた口調で言った。しかしその中にある禁句を、リーフは聞き取ってしまう。

「え…今、君って…」

「ん？だって雄じゃないのか？一人称僕だし」

そしてこの一言、リーフの周囲に黒い気が漂う。

「…ねぇ、エンペルトさん…僕は雌だよ？さっき何て言ったの？ねぇ、エンペルちゃん。ねぇ、命名ツノペンちゃん？」

リーフがにっこり笑いながら、ネロを隔てた向かい側に座っているエンペルトに言った。そして最悪のネーミングセンスがエンペルトを攻撃する。

「ツ、ツノペンちゃん？どうしたんだ、リーフく…リーフさん」

その特性のいかくをも彷彿とさせるリーフの無言の迫力に、エンペルトはたじたじになった。
「僕ね、ツノペンちゃん…雄と間違えられるのがね、ツノペンちゃん、一番嫌いなんだよ？ね、ツノペンちゃん」
リーフはエンペルトにつけたニックネームを連呼した。しかもただ言い回しが気に入っただけで、何の悪気もなく酷いニックネームを言うのだからたちが悪い。
「あの…すいません、許して下さい。あとその名前で呼ばないで下さいお願いします」
それを聞いたリーフは、このニックネームにさらに悪意を入れた。
「だめ♪ツノペンちゃん、ずっと呼んであげる、ツノペンちゃん。許さないよ、ツノペンちゃん、ツノペンちゃん、ツノペンちゃん、ツノペンちゃん？」
その怒涛の責め句は、エンペルトの精神に大きなダメージを与えた。この手の物は特に、エンペルトのようなプライドの高いポケモンには効果が抜群なのだ。
「まって本当に、リーフく…リーフさん。錯乱してるよちょっと」
事実、今のリーフは気がふれている。エンペルトはプライドがズタズタにされ、少し涙目になっていた。
「許さない、許さない、許さない、許さない、許さない。消えろ！エナジーボォォォル！！」
リーフがついにエンペルトに本気のエナジーボールを発射した。

その時

「つつ…うるせえな、何の騒ぎだ」
タイミング悪くネロが目を覚まし、起き上がった。
「あ…」
「え？」

一瞬だけ時間が止まった…
そして…
チュドォォォォン！！
運悪くエナジーボールに被弾し、目を回して再び気絶してしまった。
リーフの頭からサッと血が抜ける。
「うわぁぁぁぁ！！ネロォォォォ！！！！！」
リーフの叫び声がここ一帯に木霊した。
・
・
・
「…で、ツノペ…もといエンペルト、おまえはここ辺りの地理を知っているのか」
それから暫くしてネロが目を覚まし、リーフが落ち着いたところでネロとリーフの、エンペルトへの質問の時間が始まった。
「ああ、詳しいとまではいえないが、大抵の事は調べ終えている」
時間が経ち、エンペルトも、元の冷静な調子に戻ったようだ。
「そうか、じゃあまずここが何処か教えてほしい」
「と言うと？」
ネロの問いにエンペルトは聞き返してきた。事情がわからない以上、当たり前の反応だろう。
「ああ、俺達はキザキの森の最奥部に空いていた穴からここにきた、信じられない事だろうが…」
ネロがそう言うと、エンペルトは少し考える素振りを見せ、言った。
「…それは恐らく空間のひずみが原因だろう、ここ数日、そう言った物が確認されている。人為的な物ではないだろうが。ひずみが出

現したダンジョンで神隠しが起こったという報告もある。そんなところを通ってきたのか」
「やっぱり危険だったんだ…」
リーフが言った。
「…さて、ここが何処か…だったな、そんな所から来たならば知るはずもないか…ここはゼロの島、不思議な地図を見る限り湖があるここはさしずめ中央部と言った所か…どうした、リーフ…さん」
ゼロの島、その名を聞くやいなや、リーフは震え出した。
「リーフ？　ゼロの島のこと、知ってるのか？」
ネロが言うとリーフは震えながら語り出した。
「ゼロの…島はね、凶悪なポケモン達が住み着くという最高最悪のダンジョンのこと…だよ」
「……」
ネロは静かに聞く。
「しかも、ポケモンの力を封じ込める何らかの力を出しているとされているんだ…でもまさか、ここがそうだったなんて…」
「…何故かここではその力が働かない、何か、力を打ち消す反対の力が働いているのかもしれないな…」
これでこの質問は終わり、と言うような素振りをエンペルトが見せたのでネロは次の質問に移ることにした。
「…二つ目の質問、お前はあのＭＡＤとか言うやつと知り合いのようだが…お前、一体何者だ？」
ネロはそう言ってエンペルトの目を見た。どんな些細な動揺も、見逃さないように。
「…答える気はない」
――…！！…こいつ…
ネロは、エンペルトの目を見たとき、頬を冷や汗が伝った。
「さてと、質問は終わりみたいだな」
そしてエンペルトは声の調子を若干変えて、質問を切った。
「ありがとう、エンペルトさん」

リーフはエンペルトのさっきの実に纏う空気の急激な変化に気がついていないらしく、エンペルトに礼を言った。
「もしお前達がキザキの森に戻りたいんだったらこのバッチの力で送ってもいいけど」
エンペルトはそう言って腰に下げているリーフのポーチよりも遥かに大きいバッグから、モンスターボールに翼が生えたような形の探検隊バッチを取り出した。
「え…でも探検隊バッチの転送機能は自分が所属しているギルドにしか送れないはずじゃ…」
リーフが言った、探検隊バッチには本来そんな能力が無いことは一般のポケモンであるリーフでも知っていることだ。
「俺のはそう言う事が出来る特別製なんだよ、それに俺のギルドに送ったとして、お前達がいる町と遠く離れてたらどうする」
「うーん…それはちょっと困るね…」
リーフは苦笑いした。
「だからダンジョンの入り口に転送するんだ、そこからなら帰りやすいだろう？」
「確かにな、じゃあ、頼む」
ネロはそう言って立ち上がった。
「あ、でもちょっと待って」
リーフはポーチから澄んだ青色をした玉を取り出し、エンペルトに渡した。
「これ、この前探検した所で見つけたの。助けてくれたお礼だよ、ありがとう」「これは…こちらこそありがとう。じゃあ、送るぞ」
そう言ってエンペルトはバッチのスイッチを押し、ネロ達の方を向き、上へ掲げた。その瞬間、ネロ達の体を光が包み込み、ネロ達は眩しく、目を閉じた。

目を開けたときには、そこは森への入り口の前であった。
「ふう～やっぱりこの感覚は慣れないなぁ」
リーフが背伸びして言った。
「…ネロ？」
ネロは考えていた、あのときのエンペルトを、ＭＡＤのことを聞いた時のあの目の事を。
「ネロ、行くよ、僕のすむ町に案内してあげる」
「ん？あ、ああ」
リーフに急かされ、ネロはリーフについて走り出した。
――あのときのエンペルトの目…あの凍てつくような冷たい目…間違いない、あの目から明らかに殺気が出ていた…あのチームＭＡＤへの……明らかな憎しみが滲み出ていた…
・　・　・
「こんな所にいたのですか…皇帝様」
一匹のポケモンが、エンペルトに言った。虹色に輝く鱗を持った、とても美しいポケモン、ミロカロスだ。
「その呼び方はよせ、姫君」
「それはお互い様です。所で何ですか？その玉は」
ミロカロスはエンペルトが手に持つあの澄んだ青色の玉を指した。
「これか？これは恐らくみずのオーブ、あいつ、なかなか見所があるな」
「…やれやれ、また勧誘ですか、よく飽きませんね」
そんなエンペルトに、ミロカロスは呆れた口調で言った。
「…さて、無駄話はここまでだ。ＭＡＤを追うぞ」
「ええ、【脱走したらお仕置きだ】…某有名ギルドに習うつもりはありませんが、裏切り者には制裁を下さねばなりませんからね」
そう言うと、二匹はＭＡＤのあとを追い、ゼロの島北部へと分け入っていった。

六話　ゼロの島の湖（後書き）

ネロ「壊れたなあ」

リーフ「壊れたねえ」

エンペルト「壊れた本人が何言ってるんだ」

ネロ「うるせえぞツノペン」

ツノペン「ツノペンってお前！！ってかアイコンｍ…」

はいはい、ツノペンちゃんメタ発言は自重しようね～

はい、ではまた次回。

皇帝様「貴様らも制裁を加えてやろうか」

はいはいさようなら～

エンペルト「嗚呼…なんということだ…みんながスルーだなんて…」

七話　アルトタウン（前書き）

はい、かなり遅れてしまいましたが七話です。
今回で長かった一日がやっと終わるのです。

ネロ「やっとか…」

リーフ「長かったぁ…」

ではどうぞ。

七話　アルトタウン

「ふう、ついたよネロ、ここがアルトタウン。僕が住んでいる町だよ」

日が西に傾き、空が赤くなってきた頃、ネロはリーフの先導で、町についた。

町の名称はアルトタウン。リーフが言うにはまだ発展途中の町らしく、あまり治安は良くないらしい。

「結構かかったな、キザキの森を出たときはまだ正午だったから数時間か？」

「森を出るなり僕が言った方向とは全く違う方向に走っていったのは誰だったかな～ピカジー？」

リーフが言った。それは事実で、方角も分からずに暴走したネロは、危うく危険地帯の砂漠に足を踏み入れる所だったのだ。

「うっ…悪かったよ…」

「全く…真っ直ぐ行けば三十分で着くんだよ、方向音痴ならそう言ってくれればよかったのに…」

「誰が方向音痴だ、たまたまだ」

ネロは無自覚のようだった。

「まあとりあえず、町を案内するから今度こそ付いてきてよ？」

そう言ってリーフは町の門をくぐった。

「待てよ、おい」

――キレてんのか？あのエンペルトのこと…

ネロはそんなことを思いながら、リーフの後を追って町に入った。

「えっと…入ってすぐ左にあるのがカクレオンショップのアルトタウン支店、その次にメタングのジャンク屋。…さっきの右の小道を

行った先にはいろいろな旅のポケモン達が泊まるカラカラアパートだよ」
リーフは歩きながら説明した、ネロはそれを聞きながらついて行く。

中央の広場でリーフは立ち止まった。
「それから…」
リーフは少し声を落とした。
「どうした？」
ほんの少しだけ、リーフは怯えた表情が見えた気がした。
「うん…あとで…良いよね…次は町の西側だよ、ついてきてね」
リーフは少しだけ広場の南側、切り立った崖が見える方向の通りをちらりと見て呟き、また歩き出した。
「ああ…頼む」
ネロは余計な詮索をせずについていく。

「え～、左に見えるあれがマルノームの倉庫で隣にクチートの鑑定所、右側三軒は全部空き家…東側も含めて説明するより使った方が早いよ」
東側も含めて何故かポケモンの営む施設の外観は、その店主の姿を模した形状になっていた。

そしてしばらく歩くと町の端であろう交差点についた。
「ここから先に行けば町の外、北に行くとギルド…」
――ギルド…同業者組合か、どうやらある程度の文化はあるみたいだ。
ネロはリーフの説明を聞きながらそんなことを思った。記憶は失っても、語の知識は何故か覚えていた、門に書いてあった足形文字も読めた。…日常生活に支障は無さそうで少し安心したのだ。

「…今ギルドに用は無いから、ネロ、こっちに来て」
リーフはギルドの反対側、南方の道を歩いて行った。ネロも付いて行く、道なりに進むと鋭く切り立った崖の近くに来た、微かに磯の香りもする、恐らく海が近いのだろう。リーフの向かう先に、崖と向かい合うように建っているレンガ造りの建物が見えた。
「あれがお前の家か？」
「正確には居候させて貰ってるんだけどね」
リーフは家の扉を叩く。ドアノブはピカチュウとなった今のネロよりも身長の高い、リーフでも届かない。
「ヤドキングさーん！僕だよー！リーフだよー！」
だからこうやって中にいるポケモンに開けてもらうしかない。
少し経つと、扉が開き、中からとぼけた顔をしたヤドキングが出てきた。
「やあリーフ。今日は遅かったね。それとそっちのピカチュウは？見慣れない顔だけど、もしかしてリーフのボーイフレンド？」
「は？」
「そっ、そんなんじゃ無いよ！」
リーフの顔が何故か赤くなった。
「ハハハ、まあ立ち話も難だから入って」
リーフが妙に慌ているのを見てヤドキングは笑い、ネロ達を中に入れた。

家の中は思ったよりも広い、手前には【1F・ロビー】と書かれた看板が立っており、その近くには二階へ上がるための登り階段があった。カウンターもあり、奥にはソファーやテーブルもある。ここも何かしら営業をしているようだ。
「取り敢えず適当に座って、話はそれからだよ」

そう言いつつヤドキングはカウンターを素通りし、ここは自分の特等席だと言わんばかりに片方のソファーにどっかりと座った。
ネロ達はテーブルを介した向かい側のソファーに座る。
「で、リーフ。そっちのピカチュウを紹介してよ」
ネロ達が座ると、ヤドキングは言った。
「うん。このピカチュウはネロ、キザキの森を一緒に探検したんだ。ネロ、こっちのヤドキングはこの家の持ち主、僕はここに居候させて貰ってるんだ」
少し変な人だけどね。とリーフはネロの耳元で小さく付け足した。ヤドキングは少し感ずいたらしく、怪訝そうな顔をした。
「よろしく」
「いえいえ、こちらこそ」　二匹はテーブルごしに言葉を交わした。
――このヤドキング…出来ることなら近付きたくないな…思い過ごしかも知れないが、何か嫌だ…
ネロはこのヤドキングに心を見透かされているように思えてならなかった。
――このピカチュウ、僕を疑っている？…力がある、見所があるね。
事実、ヤドキングはネロの心をある程度読み取った。だがしかし、今はまだ自分が干渉すべきでは無いと考え、あえて触れることはしなかった。

「あ、そうだ。そろそろ夕飯の準備しないと、僕、抜けるね」
会話が途切れて数分後、リーフはそう言って席を立った。
「あ、もうそんな時間？じゃあ準備が終わるまで自由時間と言うことで。何処かに行くときは僕に一言言ってね、じゃあ解散♪」
ヤドキングはそう言って、ゆったりとソファーに座り直した。ネロはヤドキングに外に行く、とだけ伝えて玄関の扉の近くにあった踏み台を使い、外に出た。踏み台は玄関口に置いておく、潮の香りが何処から来ているのかを探すことにした。

案の定、それが何処から来ているのかは直ぐに分かった、崖に大型のポケモンでも何とか通れそうなトンネルが空いていたのだ。そこから潮風がこちらに入ってきていた。

「……」

ネロは波の音が反響するそのトンネルに入った。内部は何も無い、ダンジョン奥地への一本道のように真っ直ぐ伸びていた。距離は思ったより短く、直ぐに抜けた。トンネルを抜けた先には岩で覆われた小さな浜辺があった、穏やかな海水が夕日の光を反射し、その光が周りを取り囲む岩場に当たって幻想的な光景を作り出していた。

――ゼロの島の有無を言わさぬ絶景とはまた違う。よく分からないが、何か…あたたかい風景だな…

自分以外の誰もいない綺麗な浜辺、嫌でも感情に浸ってしまう。

――それにしても…俺は一体何者なんだ…？目が覚めたら記憶を失いポケモンに、覚えているのは自分が人間だったと言うことだけ、自分の名前すらも分からない…唯一の手掛かりとなるのは【Ｎｅｒｏ】と刻まれたこの首飾りのみ…

俺はこれからどうなるんだろうか…

俺の正体が分かる日は来るのだろうか…

不安が無いと言えば嘘になる。ネロも悩み苦しむ一人の人間…いや一匹のポケモンなのだ。

「ネロー！準備出来たよー！」

後ろからリーフの声が聞こえてきた、振り返るとリーフがこっちを見ている。「…ああ、分かった」

ネロは心の内にある不安を隠し、そう言って立ち上がり、ヤドキングの家に戻ろうとした。

「ここはね、僕のお気に入りの場所なんだ…干潮の時にしかこの砂浜は見つけられないんだ、運がいいね、ネロ」
リーフが独り言のように呟いた。
「……早く行くぞ、リーフ」
「うん、戻ろっか」

「…あっ、遅いですよ二匹とも。あまりにも遅いから僕が全部食べてしまおうかとも思いましたよ」
家に戻ると、机に今日のディナーが並んでいた。色鮮やかなグミの詰め合わせが中央にあり、三匹にそれぞれ林檎が二個と水というシンプルなメニューだ。少なすぎるとも一瞬思ったが、よくよく考えるとネロもポケモンになり、胃も小さくなっているため、十分な量だった。
「ごめんなさい、ヤドキングさん」
「いいよいいよ、今日は奮発してグミを多めにしたからね。さて皆、合掌しよっか」
ヤドキングが言うと二匹は手を合わせる、それを見てネロも合わせた。
「「いただきます！」」
「…いただきます」
合掌が終わり、ネロは試しに目についた青いグミを食べてみた、ゆっくりと味わってみる。
――…渋い、お世辞にでも上手いとは言えない、俺に合わない味だ
ポケモンによって好みがハッキリ別れるほどに癖のある味わいだとネロは思った。次に電気っぽい色をした黄色いグミを食べてみる事にした。今度もゆっくりと味わって食べる、このグミはネロに合ってるらしく、美味しく食べられた。
ふと、グミが入っている皿を見ると、ぱっと見て十個以上は入っていたグミがきれいさっぱり無くなっていた。どうやらネロが二個

グミを食べている間に他のグミを二匹が食べていたらしい。
――おいおい、少しは味わって食べたらどうだ…それともこれがポケモンにとっては普通なのか？
およそ五分で完食するがその頃には二匹とも後始末を終えており、ネロが最後だった。

―数時間後
「じゃあ僕はそろそろ寝るよ、ベッドは用意してないから適当に寝てください。ではおやすみ～」
ある程度会話をして就寝時間となり、ヤドキングは二階へと上がって行った。「適当にって、どこに寝ろってんだよ…」
ヤドキングが二階に上がったのち、ネロが文句を言った。
「ネロ、僕達は居候なんだから文句を言わないの。それに寝床はソファーで事足りるよ」
そう言うとリーフはソファーに横になり、すぐに寝息をたて始めた。
――寝るの早いなこいつ。まあ文句を言って野宿になるよりはましか
ネロはヤドキングが座っていた方のソファーに行き、横になった。
――何だろうか、こいつと一緒にいると不安を忘れられる…ヤドキングとはあまり関わりたくはないが、決定的な手掛かりを手に入れるまでこいつと一緒にいるのも言いかもな…
そう考えている内に強烈な眠気が襲ってくる、思えばダンジョンでは休憩と呼べる休憩は取っていなかった。
――…もういい、寝よう
「おやすみ…」
ネロは独り言のように言って、目を閉じ、眠りについた。

七話　アルトタウン（後書き）

はい、今回はこれで終了です。

取り敢えずこれからは週一更新を目指して頑張って行きますゆえ、どうぞよろしくお願いします。

八話　ギルド大波乱！？（前書き）

遅くなってすいません！！相変わらず時間を守れない作者です。

ネロ「絵にうつつを抜かしてるからだ馬鹿野郎」

ツノペン「この小説を楽しみにしてる奴もいるかもしれんのだ、ちゃんと書け」

ツノペンにまで言われちゃ俺の立つ瀬が…

うん、無理せず徐々に、習慣にしていこうそうしよう。

では、八話始まります、どうぞ！

八話　ギルド大波乱！？

翌朝早朝…
ネロはドタドタと騒がしい音で目を覚ました。
見ればリーフが何かの準備で家中を走り回っている。
――…何だ？こんな朝早くに。
「あ、起きましたか、ネロさん。起きたのなら貴方もほら準備準備！」
ネロが起きたのに気づくなりヤドキングは言った。
「…ふぇ？準備？」
寝起きのため、頭が働かずにネロは物凄く間の抜けた返事をしてしまった。
「あらら…ネロ、もしかして朝弱いの？」
「ほらこれでさっさと目を覚まして下さい！」
そう言うなりヤドキングはネロにみずてっぽうを浴びせかけた。
みずタイプの初歩的な技とは言えなかなかの水圧だ、それが寝起きのネロの顔面にクリーンヒットした。
「んが！？…つっ…何すんだ！」
ソファーから飛び起きてネロが言った。
「何って顔を洗ってあげたんです、まずは毛並みを整えてきて下さいよ、ぐちゃぐちゃですよ？」
「…分かったよ」
ネロは渋々洗面所に向かった、この家の間取りは昨日、リーフに教えてもらっていたのだが…

ゴッ！

洗面所に向かおうとしたとき、机の足の角にネロは左足の小指を思い切りぶつけてしまった。

「！！」
鈍い音と共にネロは声にも出ない程の叫び声を上げた。
「あら？ネロさん？何うずくまってるんですか？」
残っていた眠気も一瞬で吹き飛んでしまったようだ。
・
・
・
「……朝っぱらからひどい目に遭った」
わけもわからず言われるがままに準備を終え、言った。
「七割がた貴方の不注意ですよ？」
「それでも三割はお前だ、ことあるごとにみずてっぽう飛ばしやがって…」
ネロは自分の左足をさすりながら怒り口調で言った。
「まあまあ、いずれ慣れるから…」
それをリーフがなだめる。

「それにしても、どうにかなんないですかねぇ…頭のくせ毛、それに目付きに赤目、お世辞にも外ずらが良いとは言えませんよ」

――くせ毛も赤目も、ポケモンになったときからの物なんだがな…

「…ま、気にしないことにしましょう」
ヤドキングはやれやれと言った口調で言った
「…所で、今日は何かあるのか？」
朝っぱらからこんなに騒がしいんだ、何か大事な用事があるのか…それともこれがポケモンにとっての普通なのか。
「あ、そうそう！今日はね、僕がこの町のギルドに入隊する日なんだ、だから荷物を準備してたんだけど…」
――それなら納得だが、何で俺まで…まさかとは思うが…

ネロはヤドキングの方を見る。ヤドキングは相変わらず惚けた顔をしていた。
「あ、気付きましたか？…予想通り鋭いですね。僕が昨日、ネロ君もギルドに推薦してきたんですよ」
「はぁ？」
あまりにもさらっとしたヤトキングの答えに、ネロは唖然とした。
「居候とは言え、職を持たないニートでも困りますし。聞いたところあなたにはなかなかの力量があるようですしね、エンペルトのギルドに入団させるように親方様に取り計らったのですよ」
確かにニートは嫌だが…だからと言ってなんでそんな事を勝手に、それも俺に何も言わずに…
「さ、そうと決まったらギルドに行ってきなさい♪」
そう言うとヤドキングは昨日と同じようにソファーに座った。
「うん！行ってくるよ」
リーフは嬉しそうに扉を開け、外に出た。
「ネロ、早く行こうよ」
振り替えってリーフはネロを急かす。
「……はぁ」
理不尽だ、そう思いながらネロも外に出て、リーフと二匹、ギルドに向かった。
・
・
・
「…で、ここがエンペルトのギルド…か」
エンペルトのギルドは例によってエンペルトを模した外観だった。が、どう見てもギルドには見えない、他の施設と比べて少し豪華になり、木を格子状に組んだの扉がついた程度だ、リーフの言う勇気あるポケモン達が集う、探検の拠点にはどうしても見えない。
「小さすぎないか？」

明らかに団体が入る大きさではないのだ。
「どのギルドも外側はこんなものだよ、中は地下になっててとても広いんだ」
そう言ってリーフはギルドに入ろうと歩を進める、向かうギルドの手前には、木を組んで縄で縛っただけの様に見える頼り無さげな網があり、その網の下にはぽっかりと穴が空いていた。リーフはその網の上にためらいも無く乗る。
「…それ、重い奴が乗ったら壊れないか？」
ネロはたまらずリーフに言った。
「特別強い木と縄を使ってるからカイリキーが百匹乗っても大丈夫らしいよ」
――いやいやいや、おかしいだろ、何処をどう作ればそんな強度になるんだよ…
『ポケモン発見！ポケモン発見！』
そんな事を思っていると下から声が聞こえてきた。
『誰の足形？誰の足形？』
別の声が最初の声に聞く。
『足形はキモリ…リーフさんです！』
最初の声が答える。
『リーフだと？分かった！開門！』
別の声がそう言って直ぐに、扉が上に開いた。
「…はたから見れば凄い仕組みだな、ある意味」
『おい！そこにいるお前！お前もそこに立て！種族が分からんだろうが！』
「あ…ごめん！ヒヒダルマ！さ、ネロも」
地下にいるらしい、ヒヒダルマに一括され、リーフは網から離れ、ネロを促す。
――これに乗るのか、不安って訳じゃないが、何だろう、こそば

そうと言うか、何と言うか…ええい！なるようになれだ。
ネロはリーフと同じように網の上に乗る、すると即座に反応を返された。
『ポケモン発見！ポケモン発見！』
『誰の足形？誰の足形？』
『足形は…ピカチュウ！ピカチュウだ！！』
…ん？リーフと反応が全く違う…
『何だと！！あの桃風船め！！ここを突き止めやがったか！！』
「…へ？」
直後に地下からブザーが鳴り響いた。
『スパイ侵入！お前達！直ちに撃破、拘束しろ！！』
おいおい待て待て。何だよこれ、なんで俺がスパイ呼ばわりされなきゃいけないんだ！？
少しの間を置いてギルド入り口からポケモン達が大群で押し寄せ、ネロとリーフを包囲した。
「えちょっ…みんな！？どうしたのさ！」
リーフが戸惑い、問いかける。
「…？色違い？」
「色違い…かぁ」
「ポケ違いかよ…」
ポケモン達はネロを見て口々に呟き、リーフの問いには誰にも答えない。場はなんとも言えない微妙な空気に包まれた。
「皆さん、侵入者とは…色違い？」
ギルドから一匹、ミロカロスが姿を表した、そしてネロを見て思わず拍子抜けした様な顔をした。
「何だ何だ、なんの騒ぎだ騒々しい」
遅れてもう一匹、見覚えのあるエンペルトがギルドから出てきた。
エンペルトの問いにも、誰も答えない。
「お前は…」
「あなたは…」

「ん？お前達、ゼロの島の…」
そう、ゼロの島でネロ達を助けたポケモン…
「「ツノペン！」」
ネロとリーフを除いたこの場にいる全てのポケモンがずっこけた。

八話　ギルド大波乱！？（後書き）

個人的にギルドの網はイナバ製だと思ってるの。

リーフ「百人乗っても大丈夫って奴の事だよね」

累計約十トンまで耐える網って何の素材で出来てるんだろうね…

始まりの樹？

リーフ「いや僕に聞かれても…」

さて次回はいつ更新できるのか。更新速度は早くなるのか！こうご期待！

九話　ヘルメスの名（前書き）

はい、かなり遅れましたが九話です。一体どうすれば更新速度が上がるのか、皆目検討もつきませんです。とりあえずはのんびりやっていこうかなと思ってる今日この頃。

では九話をどうぞ。

九話　ヘルメスの名

「で、ツノペン」
と、ネロはエンペルトに切り出した。
さっきまでの張り詰めた空気はどこへやら、騒々しかったギルドは落ち着きを取り戻し、すっかり仕事モードに突入している。リーフも早くギルド内部へ入りたそうに目を輝かせている。
「お前がこのギルドの親方か？」
ネロは単刀直入に、自分の推測を述べる。
「…何故俺が親方だと思う」
その質問をエンペルトは質問で返す。エンペルトにはネロについて一つ確かめておきたいことがあった。
「何故…って聞かれてもな、ただ何となくだ、恐らくここまで登ってきたポケモンたちは多分このギルドの中でも実力者だろう？お前はその中で全く違う空気を纏ってた、そう感じたんだ」
エンペルトにとってもネロにとってもそれはお世辞にも具体的とは言えない理由だったが、その答えはエンペルトの抱く期待に応える物だった。
「そうか」
エンペルトは満足そうに小さく笑い、言葉を続ける。
「そのとうり、俺がこのギルドの親方、エンペルトだ」
「ええ！？ツノペンこのギルドの親方だったの！？」
その答えを聞いたリーフは驚き、さらに光を増した目でエンペルトを見る。
「ツノペンはやめて…リーフさん、ここでは一応皇帝様で通ってるんだ」
少しだけ平静を欠いた状態でエンペルトは答え、すぐに持ち直して話を続ける。
「君たちの話はヤドキングから聞いている、空間のひずみを通って

きたとはいえゼロの島にたどり着き、屈強を誇るアリアドス軍団を退け、あの悪名高いＭＡＤにまで挑んで見せたその実力、運、そして勇気、拒むものはいないだろう、ギルド入隊を心より歓迎する」
エンペルトは左右の翼をを大きく広げ、歓迎の意を表す、その姿からはギルドを束ねる者としての威厳を感じられた。
「やったね！ネロ！」
リーフは嬉しそうにネロに笑いかける。
「ん？ああ」
ネロはあまり締まり切らない返事を返した。
――…結構簡単に入れるんだな、…拍子抜けだ。
「隊員に案内をさせるからまずはギルド内を見ていってくれ、正式な手続きは俺の部屋でやるから後でもいいだろう、それではまた会おう」
そう言うとエンペルトは踵を返し、ギルドの中へ戻っていった。
「じゃあ僕たちも入ろうか、ギルドに！」
リーフは入りたくてうずうずしている様だ、どのみち入らなければ話しにならない、ネロはうなずき、ギルドの玄関に入る。
「梯子か」
玄関に入るとすぐ前に梯子があった、やはり地下かとネロは思った、恐らく下ではすでにギルドの業務が行われているのだろう、ポケモン達の元気な声が聞こえてくる。
梯子を下りきると、そこには広大な空間が広がっていた、様々なポケモン達が仕事に依頼に忙しなく動いている。
…？
瞬間、ネロは違和感を覚える、違和感の理由はすぐに分かった、地上で見たポケモン達の顔が全く見えない、隣にもさらに下る梯子が見えるので下にいるのかとも一瞬考えたがどうも違うようだ。そんなことを考えていると横から誰かに声を掛けられた。

「なんだ、お前たちギルドに入隊しようと思って来てたのかよ」
声のした方向を見るとそこには緑色の体で、頭に一本角を生やしたポケモンが立っていた、いわはだポケモンのヨーギラスだ。
「うん、僕はリーフ、こっちはネロ、君もこのギルドの弟子なの？」
「ああ、俺はヨーギラス、少し前にここに入ったからお前達の先輩にあたるな、このギルドを案内してやるからついてこい」
そう言って歩き出すヨーギラスを見てネロはお世辞にも言葉遣いは良いとは言えない、というより態度も悪い奴だと思った。
「ここは地下一階、救助の依頼とお尋ね者の討伐を受け持ってるんだ、ある程度名の知れた奴等も来るから話を聞くのもいいかもな、次に地下二階だ、付いてこい」
ヨーギラスは梯子を下り下へと降りる、ネロたちもそれに続き、地下二階に降りた。
「ここは地下二階、主に食事や見張りなんかをここでする」
ヨーギラスは奥の右側にある穴を指差す。近くには赤いだるまポケモンのヒヒダルマがいて、視線に気付いたのかネロたちに目を向ける。
「あそこが見張り穴、ヒヒダルマとナックラーが常勤だけどお前たちにも見張り番をお願いすることもあるだろうな」
ヨーギラスの紹介が終わるとリーフはヒヒダルマに軽く頭を下げて挨拶し、ヒヒダルマはそれに軽く腕をあげて答えた。
「次にこっちだ」
ヨーギラスは次に右隣を指差した。そこにはカウンター越しにポケモン用のベッドがあり、ナース帽をかぶったヒヤリングポケモンのタブンネがいた。
「あれはタブンネのドリームカウンセル、ポケモンの夢の中に眠ってるって言う潜在能力を呼び覚ます施設らしいけどまだ研究中らしい、今は研究をしてる傍らで怪我をしたポケモン達の治療も行ってる」
タブンネはこちらに気付くと礼儀正しく一礼した。リーフもそれ

に応えて頭を下げ、よろしくね、と言葉を交わした。
「そんで右にある入り口を入ると食道、左には弟子たちの部屋、そしてすぐ左隣が親方の部屋だ」
ヨーギラスは残った部屋を簡潔に説明した。
「これでこのギルドの案内は終わりだ、後は使って覚えればいい」
「ありがとう！ヨーギラス♪」
リーフが言うとヨーギラスはリーフを睨み付ける。
「勘違いすんなよ、俺はお前達と馴れ合うつもりはない、お前達がこのギルドに入るんなら、お前達は俺のライバルだ」
ヨーギラスは吐き捨てるように言うと梯子を上っていった。
「馴れ合うつもりはない、か…ちょっと寂しいな」　残念そうにリーフは呟いた。
「じゃあ行こっかネロ、ツノペンの所に」
「ああ」
ネロはエンペルトのいる部屋への扉を開け、中に入った。部屋の中にはエンペルトとミロカロスがいる。
「一通り中は見て回ったか？これが私のギルドだ、どうかな？印象は」
エンペルトが言う、改めて見るととても落ち着きのある空気を纏ったポケモンだ、彼の落ち着いた立ち振舞いはエンペルトという種族における特徴でもあるのだろう。周囲から皇帝様と呼ばれる彼はこの近辺で多大な人望を持っているのだ。
「うん、とっても面白そうなギルドだね♪」
リーフは言う。
「気に入ってくれたようで安心したよ…おっと、雑談はこれくらいにして、入団の手続きをしないとな、ミロカロス」
「はい」
ミロカロスはエンペルトの呼び掛けに応じ、奥の棚から一枚の紙を取り出してネロたちの前に置いた。その紙には足形文字で【契約書】と書いてあり、チーム名１つと隊員の名前４つの記入欄、そし

て個人認証のための足形を入れる欄があった。随分と事務的なんだなとネロは思った。
「これに書けばいいのか？結構簡単だな、入団試験も一応覚悟はしてたんだが」
「うちは、と言うかだいたいのギルドは来るもの拒まずの精神でやってるからな、その契約書にチーム名、隊員名を記入して、リーダーの足形を入れて出してくれ」
「分かった」
ネロは記入欄に自分とリーフの名前を記入し、自分の足形を入れた。リーダーはキザキの森での探検のことを踏まえてネロに決まった。
「あとはチーム名だね」
「チーム名…か」
残る項目はチーム名、これからずっとその名前でやっていくことになるから出来るだけ意味のあるものにしたいな…もちろんセンスも必要だろう、リーフに決めさせるわけにはいかない。
「リーフズ・ビクトリー突撃隊とかはどうかな？」
ほらみろ、こんなのしか考えられない。
「却下」
とネロはリーフの案を一蹴した。
「う～…」
どうやらこの名前には自信があったらしく、二つ返事で却下されてリーフは気を落としたようだ。　さて、とネロは考える、頭に入っている語の知識からどれがチーム名にふさわしいかを探す。単純な名前じゃ駄目だろう、出来るならもっと捻りのある名前がいい。
「ヘルメス…ってのはどうだ？」
この名前はふとネロの頭に浮かんだ単語だ、意味合いとしては間違っているかもしれないが。
「ヘルメス…？」

「ああ、よく覚えてはいないが、確か旅人の守護神とされる神の名前だったと思う。これから俺たちは探検隊として各地を飛び回ることになるだろう、そのとき旅人の神にあやかれるように…って思ってな。たしか他にも意味があったはずだが…」
他にも守護する対象があったはずだが肝心な所が思い出せない。
「へぇ、ヘルメス、守護神か…いい名前だね、それにしよう！」
だがリーフは気に入ったようだ、ネロはうなずき、契約書の最後の欄、チーム名の所に”ヘルメス”と書き込んでエンペルトに渡した。
「これでいいんだな？」
「ああ、少し待っていてくれ」
エンペルトは契約書を受けとるとそれをミロカロスに渡し、棚から探検隊バッグてバッジを取り出してネロに渡した。
「これは？」
「探検隊の象徴、探検隊バッグとバッジだ、バッグと一緒に道具もいくつか渡しておいた、探検の役に立ててくれ、おめでとう、これで君たちはこのギルドの一員だ、これからの働きに期待するぞ」
これで晴れて探検隊の仲間入りらしい、
「やったぁ！これで僕らも探検隊の仲間入りだ！」
リーフは待ちに待ったその言葉を聞き、飛び上がって喜んだ。いくらなんでもオーバーなんじゃないかとネロは思った。とはいえネロも内心は嬉しかった、まだあまりこの世界の事は分からないがこれで腰を落ち着かせることができる、自分の居場所ができる、そう思うと安心感が込み上げてくる。
そんな中、エンペルトは一枚の依頼の紙を取り出し、ネロたちに切り出した。
「さて、盛り上がっているところ悪いがお前たちには早速仕事をしてもらうぞ、チーム・ヘルメス」
ネロとリーフは互いに向き合って同時にうなずき、エンペルトを見る、チーム・ヘルメスの初依頼となるその内容は一体なんなのか、

二匹は期待を膨らませていた。

九話　ヘルメスの名（後書き）

リーフザ・ビクトリー突撃隊はとある漫画のパロディなんだぜ。

ネロ「相変わらずぶっ飛んだネーミングセンスだ」

リーフ「え…、結構いい名前だと思ったんだけどなぁ」

ツノペン「正直言って笑いをこらえるのに必死だった」

ヤドキング「センスだけはどうにもなりませんからねぇ」

ヨーギラス「ネーミングに関しては才能ねぇな」

リーフ「（，・ω・、）」

ヘルメスの他の意味、ギリシャ神話を知っている人なら気づくかもしれませんね。

では、また。

十話　怒りの洞窟―探索―（前書き）

はい、十話です、また遅くなってすいませんでした、なんか毎回前書きで謝るのが恒例になってる気が…。

とりあえずどうぞ！

十話　怒りの洞窟―探索―

〜討伐依頼〜
・お尋ね者ガブリアスを討伐せよ！
場所：怒りの洞窟
難易度：？？？
依頼主：ジバコイル

「…ガブリアス？」
依頼書を見てネロは言った。
「ああ、俺が聞いた話では屈強を誇るエレキ平原のライボルト軍団をたった一匹で壊滅させたとして指名手配されているらしい」
それを聞いてリーフは驚いた声をあげた。
「あのライボルト軍団を！？そんな強いポケモンを討伐しろって言うの！？」
ライボルト軍団は団結力と電気タイプの封殺に優れる高い実力を持った集団であり、実力派の探検家でも突破が難しいとされる、それを壊滅させたと言うのならその力はかなりの物だ。
「大丈夫だ、お前達の実力は初心者とは思えないほどに高い。恥ずかしい話だがこの依頼を任せられるのはこのギルドではお前達ぐらいしかいないのだ」
エンペルトは依頼書を五百ポケが入った袋と一緒にネロに渡した。
「これで準備を済ませるといい、いい働きを期待している」
エンペルトはそう言うとすたすたとミロカロスと共に部屋から出ていった。結果この部屋にいるのはネロとリーフだけになる。
随分と強制的なものだなとネロは思った。
「うぅ…こうなったらやるっきゃない！ネロ、行こう！」
リーフは吹っ切れた様に言って部屋を出ていく。
「おい待てよ！ったく」　ネロは渡された道具等を急いでバッグに

詰め込んでリーフの後を追った。

・

・

・

「ほう、あのガブリアスを倒しに！凄い初依頼になりましたね～」

ネロとリーフはカクレオンショップで準備を済まし、ヤドキングの家へ来ていた。

「凄いなんてもんじゃないよヤドキングさん！ライボルト軍団をたった一匹で倒したなんてポケモンにどうやって勝てばいいのさ！」

ヤドキングは下顎に親指を当てて「ふむ…」と呟いた後、奥の部屋からCDディスクのような物を持ってきて、ネロ達に見せた。

「これは？」

疑問に思ったネロは聞いた、このような物は見たことがない、こんな物をポケモンが扱えるのかと考え、人工物ではないかとさえ思った。

「わざマシンと言われるものです、中には【めざめるパワー】と言う技が入ってます。もし不安ならこれを使ってみるのもいいんじゃないですか？君たちに私からのプレゼントです」

ヤドキングはわざマシンをネロに渡すと、小さい声で「リーフを頼みます」とネロに言った。

「さあ初依頼、いい報告を待ってますよチームヘルメスさん！」

ヤドキングは期待した眼差しで言った。

「うん、ヤドキングさんのおかげで元気出た！行ってくるよ！」

「任せとけ、言われなくてもそのつもりだ」

ヤドキングのエールを受けた二匹はバッグにしまってあるエンペルトからもらったマントとスカーフを取り出した、一つは何か不思議な力を感じる紅のマント、後ろは燕尾服の様に切れていて尻尾を出せるような作りになっている。もう一つは防御スカーフ、灰色の生地に黒い水玉模様をあしらったデザインで装備したポケモンの耐久力を上げる特殊な素材で出来ている。この二つの道具を、マント

をネロが、スカーフをリーフが身につけて探検隊らしいたたずまいになる。
準備を整えたネロ達はヤドキングの家から出ると、一路【怒りの洞窟】へと向かった。
・
・
・
アルトタウンから謎めいたジャングルを避けて北へ数十分、そこにある怒りの洞窟、その入り口は名の通り異質な外見をしていた、自然に出来たであろう入り口はまるで怒り狂ったポケモンの顔にも見え、異質な雰囲気をかもし出している。
「やっと着いたね…ここが怒りの洞窟、うー…緊張してきた…」
リーフはいよいよといった様子で言った、しかしネロの返事はない。
「ネロ？」
気になってネロを見てみれば、バッグに内蔵されているスピーカーを不器用に耳に当てながらウンウン唸っている彼の姿があった。
「うーん…ん？リーフ何か言ったか？」
そんなリーフに気付き、ネロは言った。
「まだ覚えないの？覚えが悪いなぁネロは」
リーフは呆れた口調で言った。アルトタウンを出発してすぐにネロはリーフに断ってからわざマシンを使用した。
バッグに内蔵されてあるCDプレーヤーにわざマシンのディスクを入れて技の使い方を学ぶのだが、普通のポケモンならすぐに覚えられるはずのそれをネロは移動している数十分の間聞いても覚えられずにいた。
「俺はこういうの苦手なんだよ…ちょっと待ってろ」
「はいはい」

そうこうしているとスピーカーから音が突然聞こえなくなった。
「あれ？」
ネロはすぐにプレーヤーからわざマシンを取り出した、見るとわざマシンは煙を上げていて所々にヒビが入っている。
「あらら壊しちゃった…僕壊れるまで聞いて覚えられなかったポケモン始めて見たよ」　リーフがやれやれと言った様子で言う中、ネロは壊れたわざマシンをバッグにしまうと言った。
「ごめん…」
ネロは頭を下げる。
「大丈夫、別に怒ってなんかないって」
リーフは元気付けるように言った。
「そ、そうか…じゃあ行くぞ、時間取らせてすまなかった」
ネロはそう言って洞窟の中へと向かう。
「ううん大丈夫だよ、じゃあ行こう！」
二匹は洞窟の中へと足を踏み入れた。

「空気が湿っててひんやりするね」
「ああ、地下に水脈が通ってるのかもしれない」
ネロとリーフはそんなことを言いながら洞窟の中へと進んで行く。
空気が湿っていて所々に水溜まりが出来ている、出てくるポケモンは岩や地面タイプ以外にもいるだろう、恐らくは水タイプ、あとは湿り気を好む草タイプだろうか。
「そう言えばリーフ」
通路を進んでいる途中、おもむろにネロはリーフに向き合って言った。
「何？」
「リーフはわざマシンを使ったことがあるのか？」
聞いていたわざマシンの内容を反復している内にふと生じた素朴な疑問だったが、もしかしたら何かヒントになるかもしれない。

「うーん…使ったことはあるけど、流石にネロ見たいにはなんなかったな、例えばこれとか」
リーフは手に緑色のエネルギーの球を発生させる、エナジーボールだ。
「やっぱりか…」
ネロがそう言ってうなだれる。その時リーフはネロの後ろにポケモンの影を発見した。
「そのままにしてて！」
そう言って直ぐにリーフは飛び上がり、エナジーボールを影に発射し、直撃させる。
「…え！？」
手応えはあった、だが相手は倒れない、影は大きな岩をリーフに向かって落とす。
「危ねえな！」
その岩をネロはアイアンテールで打ち返し、素早くでんこうせっかを影にぶち当てた。
「ぐっ、痛…」
思い切り硬い物にぶつかった感触がしてネロは手を押さえる。効果は今一つだったがその影は倒れ、姿を見せた。
「ガントル…！がんじょうの特性でエナジーボールを耐えたんだ…ありがと、ネロ」
リーフは言った。
「礼はいい、まったく…岩タイプじゃあ痛いわけだ、行くぞ」
「うん」
ネロ達はさらに洞窟の奥へと進んでゆく。

十話　怒りの洞窟―探索―（後書き）

次回辺りから緩やかにオリジナル技やチートを使っていくんだぜ。

十一話　怒りの洞窟―中腹―（前書き）

もう…本当にすいません、かれこれ半年、失踪してましたってくらいに間が空いてしまいました…ピクシブやニコ動とかが楽しすぎてついおろそかになってしまって…。これから冬休みも近いですし何とか頑張って今までの分を埋め合わせていきたいと思ってます。

…と言ってもどうしても気まぐれに執筆する感じになってしまうんですよね。

十一話　怒りの洞窟―中腹―

ネロ達が怒りの洞窟へと出発してから少し後、ヤドキングは自宅で紅茶を飲みながら、机越しにある二匹のポケモンと話し合っていた。

「あの二匹に才能は感じましたか？…まあまだ初日ですし、分からないことの方が多いかと思いますが」

ヤドキングがそう言うと机の向こう側で座っている二匹のうち一匹、ギルドの親方であるエンペルトは苦笑した。

「ああ、お前が送り込んできたピカチュウ、ネロにはお前に似た底知れない何かを感じたよ。リーフは…まあネーミングセンスが無いことだけは確かだが…どちらも探検隊としての才能はまだ分からないな」

エンペルトは自分の感じた事をありのままに話した、このヤドキングの前では隠し事は一切通じない、その事は誰よりもよく分かっている。

「まあ、あなたの目ではそこまで見切る程度がやっとでしょうね、あなたなりに彼らの実力を、運を、才能を見極めようとあの依頼を選んだのでしょう？」

相変わらず何もかもお見通しのようだが、あいにく雑談にあまり時間は裂けられない、エンペルトは隣で本を読み耽っているミロカロスをとんとんと叩く。

「…！ああ、そうでしたね」

ミロカロスはハッとしたようで読んでいた本を閉じ、隣にあるバッグから書類を何枚か取り出した。

「…これは、調査書類ですか？」　ヤドキングは言った、見たところ書類には何かの図解や、写真が張られている。

「ああ、お前は一昨日辺りからのキザキの森の異変に気付いているか？」

エンペルトは書類を見やすいように並べながら言った。ヤドキングは下唇に手を当てて考える素振りを見せる。
「…確かに、一昨日の夜から、キザキの森からの空気が変になったように感じましたね…昨日の朝からは向こうの鳥ポケモン達の鳴き声も少し変になりました…まるで狂ったように」
「やはりな…俺とミロカロスも異変を感じた、ついさっきキザキの森に調査に入ったんだ」
エンペルトは書類の一枚目を指した、そこにはキザキの森の異変について事細かに記されている。
「空中に止まったまま制止している木の葉…ですか」
ヤドキングは書類を手に取り呟く。
「それだけじゃない、この森に生息する野生のポケモン達は皆、ある程度おとなしくさほど驚異にはならなかった、だが俺達が調査に向かった所、そのポケモン達が異常なほどに凶暴化していた…」
「なるほど…私の知る限りではそのような現象を一度に起こす方法は分かりませんね…いや…」
ふとヤドキングはあることに気づいた、キザキの森には決して持ち出してはならない秘宝がある…。
「一つだけありました。…時の歯車…ですね」
・
・
・
「大分深く潜ってきたが…まだあるか」
ネロとリーフは怒りの洞窟の奥へと探索を続ける、大分進んで行くと少しだけ開けた場所へと出た、さらに奥から水が流れ込んでおり、大きな水溜まりが至るところに出来ている。
「ここに野生のポケモンは来ないみたいだね、少し一休みしていこっか」

リーフが言った、ネロはうなずくが、頭の中がやけにぐらぐらと熱を持っていて、満足に話を聞いていられなかった。
――何だよこの感じ、妙にイライラする、何と言うか満杯な頭に無理矢理知識を押し込まれようとされてる感じだ…。
「あ～…ダメだイライラする」
ゴッ！…とネロは近くの岩壁に頭を打ち付けた。
「ど、どうしたの？」
「なんとなく…何か忘れたい気分だ」
リーフの問いに答えながらもネロはゴッ、ゴッ、と頭突きを繰り返す。
「…それ、わざマシンのせいじゃないの？」
「わざマシンの？」
「うん、わざは四つまでしか覚えられないの。それ以上は頭が知恵熱とやらを起こして危険なんだって。…もしかして知らなかった？」
「…そうだったのか……！」
ネロはふと別の方からこちらに向かってくる影を見つけた、とっさにリーフの腕をつかんで物陰に隠れた。
「っネロ！？むぐっ…」
声が聞こえないようにリーフの口を手で塞ぐ。
（静かにしろ、誰か来た）
ネロはリーフにしか聞こえないように耳元で小さく話した。そして物陰から少しだけ顔を出し、近付いてくるポケモンを見る。次第にそのポケモンの輪郭がはっきりとし、正体が露になる。
ガッシリとした紫色の体、両手に生える一本の鋭い爪に両腕に伸びたヒレのような翼、戦闘機を思わせる風貌のポケモン、ガブリアスだ。
（ガブリアス！）
（やはりな…ついさっきからピリピリとした気配を感じてたが、あいつがお尋ね者と見て間違いないな）

ネロとリーフはあのガブリアスが初依頼で倒すべきターゲットだと結論づける。

「チッ、このアジトも見つかっちまったか…早く逃げねぇと」
ガブリアスはかなり焦っていた、水溜まりから飛びはねる水しぶきで体が濡れるのも気にせずに早足でこの場を通りすぎていった。

「…あいつ、かなり焦ってたよね」
ガブリアスが通りすぎたのを確認し、リーフとネロは隠れるのを止めて岩影から出てきた。
「ああ、話を聞いた辺り逃げる気だ、急がないと逃げられる…後を追うぞ」

「うん、…ねえネロ」
リーフはおもむろにネロの背後に回る。
「なんだ？」

「…うりゃっ！！」
ガツン！
「んがっ！？」
ネロは後頭部に強烈な衝撃を受け、うずくまった。
「これでよしっと」
後ろを振り替えるとリーフが拳をもう片方の手でさすっていた、思った以上に痛かったようだ。
「これで頭もスッキリしたでしょ？」
「つっ…お前な…確かにスッキリはしたが、記憶が飛ぶかと思ったぞ…」
ネロは頭をさすりながらリーフを睨み付ける、今ので何かを忘れてしまった気がする。リーフはどこ吹く風といった様子で洞窟の更に奥を見ていた。

「行こうよネロ！…この依頼、絶対成功させようね！！」

「まったく…言われなくても成功させて見せる、行くぞ！」

ネロ達は初依頼達成への決意を再確認し、奥へ、この洞窟の最深部へと歩を進める。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2735n/

ポケモン不思議のダンジョン・白銀の盗賊団

2011年12月11日20時51分発行